

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	北澤 直宏
論文題目	ベトナムにおける新宗教の研究 —カオダイ教から見る20世紀の政教関係—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、カオダイ教団の事例から、脱植民地化後のベトナムにおける政教関係の変遷を明らかにするものである。分断国家の成立から南北統一、さらにはドイモイと呼ばれる改革開放政策の導入に至るまでのベトナム史を、カオダイ教団との関係に着目しながら編年体で記述することが本論文では試みられている。</p> <p>序章では、カオダイ教研究とベトナム史研究の双方における先行研究の問題点が指摘される。1926年にベトナム南部で設立された新宗教としてのカオダイ教史に関する実証的な研究は存在してこなかった。またベトナム南部の歴史は現在の社会主義政権下における公定史観のもとで十分な言及がなされぬまま今日に至っている。これに対し本論文では、カオダイ教団と国家権力との関係の変遷を一次史料に基づいて明らかにすることで、いま述べた問題点を乗り越えることが提案される。</p> <p>第一章では、南ベトナムの第一期共和政期 (1955-1963) における、ゴー・ディン・ジェム政権とカオダイ教団との関係が論じられる。南ベトナムの初代大統領であるジェムの執政期には、彼自身がカトリックであったために他の宗教団体に対する迫害が行われたと一般には語られている。しかし実際には、彼が行おうとしていたのは政教分離の徹底であるにすぎず、宗教団体が政治から撤退する限りにおいては、その教義内容に干渉することなく活動が保証されていた。</p> <p>第二章では、軍事クーデタによるジェム政権の打倒後に成立した不安定な軍事政権期 (1963-1967) がとりあげられる。この時期は宗教政策が不在であり、公的領域における宗教団体の既得権が無原則に復活していくことになった。これに対しカオダイ教団内では、指導層の一部が国家権力との癒着を背景に勢力の拡大を図り、対抗関係にある各派閥が自派に都合のよい神託を乱発したために内紛が激化していく。</p> <p>第三章では、グエン・ヴァン・ティエウ政権による第二共和政期 (1967-1975) の政教関係が論じられる。ベトナム共和国の消滅が現実味を帯びていく時期にあたり、宗教団体からの要求のエスカレートに対し、共産勢力による煽動をおそれる政府は譲歩を重ね、このことが国家の体力を徐々に奪っていった。</p> <p>第四章では、1975年から現在に至る社会主義政権下での政教関係がとりあげられる。社会主義政権によるベトナム統一の当初は、宗教そのものを敵視する政策が採用されていたが、近年では宗教活動を合法化し、国家権力による統制を確保する政策へ</p>			

と転換されている。カオダイ教の場合も、政府は取り込みに方針を転じ、合法化と引き換えに組織面・人事面での政府の発言力を強め、カオダイ教団を政府の社会事業を補完する翼賛団体に改造する試みを進めている。

終章では、本論文の考察を通じて明らかになった、ベトナム政教関係史およびカオダイ教団史の特徴が整理されている。現代ベトナムの政教関係に一貫するのは、政府による宗教団体への干渉が常に政教分離の達成を金科玉条として行われ続けてきたという点である。その一方でカオダイ教団は、本質的に親政府的な団体ということができる。本論文全体の考察からは、南ベトナム政府は宗教団体を迫害したために民衆の支持を失ったという定型化した語り口や、国家への抵抗を貫いて民衆の革命を先導してきたカオダイ教団というステレオタイプの理解には修正が必要であるという提言が最後に示されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文がとりあげる南ベトナム政治史とカオダイ教史という二つの課題は、そのいずれもが学術的な議論が困難な領域であり続けた。ベトナム戦争の終結は北ベトナムによる南ベトナムの吸収合併というかたちでの統一をもたらしたため、現在の公定史観のもとでは、南ベトナム政治史の客観的な復元にはほとんど光が当てられてこなかった。また、ベトナム戦争は研究者の側にも政治的な立場表明を強いるものであったことが、客観的分析の困難をさらに増幅してきた。カオダイ教団についても、国家権力への抵抗者という漠然としたイメージのみが先行し、その教団史の真剣な学術的検討はほとんど行われてこなかった。本論文はこうした研究上の困難に正面から挑戦する、非常に意欲的な研究ということができる。

本論文の学術的な意義は、以下の三点である。

その第一は、カオダイ教団史の復元作業それ自体に求められる。カオダイ教団について書かれた学術的著作はいずれもが、少数の教団関係者の宣伝文を無批判に引用することで成り立ってきた。それに対し本研究は、南ベトナム政府の行政文書や教団の内部資料の丹念な渉猟により、一次史料に基づくカオダイ教団の変遷史を説得的に提示することに成功している。調査・研究の制約が大きい社会主義国において、しかもセンシティブな問題も多い現代史の領域に関し、これだけの実証研究をなしえたという事実はそれ自体が高く評価しうるものである。

第二に、現代ベトナムの公定史観からは敗者とされる南ベトナムの政治史を再構成した点も独創的である。南ベトナム国家が宗教弾圧を繰り返し、その結果として最後は民衆によって打倒されたのだという公定史観の相対化が、本論文では実証的に説得力をもって展開されている。特に、宗教政策におけるジェム政権と統一後の社会主義政権との予想外の一致を見いだしている点はきわめて独創的である。いずれの政権の宗教政策も、何が正しい宗教なのか、何が政治的なのか、何をしたら政教分離したことになるのか、といった基準が公権力によって恣意的に設定されてきた点において共通している。この点に関する本論文の発見は、従来の研究者のなしえなかった貢献ということができる。

第三に、カオダイ教団の組織面での特徴を国家権力との関係から明らかにしたことも、本論文の新たな貢献である。本論文では、これまで抵抗者として描かれてきたカオダイ教像を実証的に修正し、カオダイ教団においては、植民地国家、反共国家、共産主義国家の別を問わず国家権力に迎合する姿勢が一貫して維持されてきたことが明らかにされている。これは神託による組織運営が複数の神託を生み出すことで派閥抗争を助長し、その解決は常に国家権力の強権的介入によってのみなされてきたという事実を反映している。こうした、国家権力への迎合と癒着がビルトインされたカオダイ教団の組織

構造は、民衆革命史観に傾斜した従来のカオダイ教論では見落とされてきた、本論文独自の新たな発見である。

以上のように本論文は、南ベトナムの政治史とカオダイ教団史、および両者の相互交渉によって成り立つ政教関係について、ベトナム国家の公定史観からも従来の先行研究におけるステレオタイプの理解からも自由な立場から、徹底した実証主義によって新たな視座を大胆に提示するきわめて優れた研究である。それはベトナム現代史研究と東南アジア宗教社会学の双方に対し寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。